

2021年2月7日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「仰ぎ見る信仰」

聖書：マルコによる福音書7：24～30

今朝の箇所を読んで感じることは何か？ 一人のギリシア人の女性が、イエスのことを聞きつけて、病に苦しむ娘を癒して頂きたいと懇願しに現れる。しかし切に願うこの女性に対して、イエスの言葉が冷たい。27節「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」ここで言う「子どもたち」とは、イエスの弟子たちのことであり、ユダヤ人のことである。また、「小犬」とは、この女性のことであり、異邦人のことである。ここの背景には、明らかにユダヤ人の異邦人に対する差別観が表れていると言わざるを得ない。イエスもはやり一人のユダヤ人として染み付いた異邦人に対する差別感情から、自由ではあり得なかったということか。ただしイエスがやはり偉いところは、その差別意識が明らかになってしまった時、そしてそれに気づかされた時、いとも簡単に態度を改められたところに、偉大さを見る。人間にとっての尊さは、間違いや差別意識を持たないことではなく、それが明らかになった時に素直にその過ちを認め、反省し、悔い改められることである。

イエスは一人の女性の熱心さに圧倒されるように、「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい」と言う。この訳は、非常に上から目線で書かれている。権威的とも取れる。もちろん、主イエスという立場的に言えば、決しておかしなことではない。ただ、口語訳聖書では、ここの言い回しを「その言葉で、十分である。お帰りなさい」と、新共同訳より、優しい表現になっているかと思う。ここは何も、上から目線での言い回しでなくてもいいところである。上に立ってその女性に、信仰の評価をして褒めていると聞くよりも、イエスご自身が、その信仰を見て、すっかり敬服し、感心してこの女性を見上げる思いで、語っていると聞き取ると、これまでのイメージが、ガラッと変わっていくものである。

マタイ福音書ではこの女性に対し、「婦人よ、あなたの信仰は立派だ」と言う。この「立派だ」は、「メガス」というギリシア語が使われていて、それは「大きい」という意味であるが、これまで小犬呼ばわりして、小さい者として見下げられていたものが、ここで突然、仰ぎ見なければならないほど大きな存在として、立派な存在として見るのである。この物語には、そういう瞬間がある。「最も小さいものこそ最も大きいのだ」とイエスがおっしゃったことが、ここで表されたと言うことである。(神谷)